

福井県知事賞

「普通」を乗り越えて

越前市南越中学校 3年

山口 世 愛

私たちが日常の中で、よく使っている「普通」という言葉。その言葉の意味や重みを考えたことはありますか。「普通はこうする。」や「普通は持っている。」などの言い回しを私たちは日頃よく使っています。国語辞典で「普通」という言葉を引いてみると、こう書かれています。「特に変わったところのないこと。当たり前であること。」私は幼い頃から、母に「『普通』っていう言葉は使ってほしくない。」とよく言われてきました。当時はその母の言葉の意味をよく理解できていませんでしたが、小学生の頃のある出来事をきっかけに私はその言葉の意味を考えさせられたのです。

当時、クラスに授業中に指名をされても、なかなか発言できない友人がいました。その子がある日の授業で先生に指名されました。でもその子はいつも通り、意見を言い出せず、ずっとうつむいて黙っています。「自分や他の子たちは、はっきり発言するのに、なぜこの子は普通にできないのかな。」その時私は心の中でそう思っていました。すると、周りの子たちが「普通に言えればいいんだよ。」「大丈夫。普通でいいよ。」と言い出しました。私はそれを聞いて、「『普通』って言っちゃだめなんだった！」とはっとしました。でも、同時に「普通」はみんな使っている言葉なのに、なぜ母はだめと言うのだろうかという疑問は残ったままでした。

中学二年生の冬のある日、私の友達が、「人間って一人一人が絶滅危惧種みたいなもんだよね。」と言いました。その友達にとっては、何気ない一言だったかもしれませんが、私の心には大きく響きました。絶滅危惧種とは、絶滅の危機にある生物種のことです。私たち「ヒト」という生物は絶滅危惧種ではないけれど、一人一人の命には限りがあります。だから人間も個々として考えると絶滅危惧種と言えるのかもしれませんが、自分も友達も家族も一人一人に個性があって「普通」ではない、唯一無二のかけがえのない存在なのです。この世界にいる人の数だけ個性はあって、それらは全部尊重されるべきなのです。

国語辞典に記載されていた、「普通」の意味は間違いではないでしょう。でも、私は「普通」も個性と同じく人の数だけあると考えます。自分の中で「普通」という基準をつくっておくことは生きていく上で便利かもしれないけれど、それを誰かに押し付けるのはその人の個性を潰して、苦しめていることと同じだと思います。自分が当た

り前だと思っていることが、一歩外に出ると当たり前ではないという意識をもって過ごすことが大切なのではないでしょうか。

最近メディアなどでよく目にする「多様性」という言葉。個性を尊重する上で、とても大切な考え方です。国籍、性別、障がいの有無、宗教や価値観の違い。人間と人間には共通点以上に相違点があると思います。でも、その相違点をも尊重し合える、そんな社会を私たちがつくっていきたいです。例えばLGBTQの人たちも結婚できたり、国籍に関係なく仕事を選べたり、文化や宗教などの違いを認め合えるような社会を思い描いています。私は、大多数の人の意見と自分の意見が異なっていて、自分の意見に自信をなくすことがよくあります。それでも、私たちの考え、価値観は尊重されているのです。私は自分の考えに自信を持って一生懸命生きていきたいです。それと同時に、周りの人の考えや意見も尊重したいです。そうすることで、誰もが生きやすい世界になることを願っています。

願いを実現する第一歩として、私は、「みんなが愛せる学校づくり」をテーマにし、一人一人が居心地のよい学校を目指して日々生徒会活動を行っています。生徒会の立会演説会では、みんなが愛せる学校をつくるために個性を尊重したいと話しました。学校という集団の中ではどうしても、多数派の意見が「普通」とされます。でも、その「普通」に捉われすぎて、学校生活を窮屈に思われないようにしたいという願いが私にはありました。

これらの経験を通して、いつも母に言われていた言葉の意味について自分なりの答えに辿りつきました。「普通や常識とは自分の知識や経験の範囲内の基準であって、それが全ての人に共通するわけではない。だから、自分のものさしだけで、物事を判断してほしくない。」という母の願いが込められているのだと。

「普通」を乗り越えて、一人一人を大切に作る「多様性」へと繋がる未来を、今を生きる私たち自身の手で創っていきたいのです。誰もが愛せる世界になることを願って。